

学位論文題名

日本語を第二言語とする女性配偶者の  
学習支援に関する研究

－ライフストーリーによる生と学びのとりえかえし－

学位論文内容の要旨

博士論文の基礎となった修士論文では日本語ボランティアから NPO へと活動を変化させていった F 国際交流センターを取り上げ、言語レベルに限定されない総合的な事業展開、学習促進者の役割、支援者と被支援者がともに学び合う関係性の構築が必要であることを明らかにした。その上で、残された課題は、外国人の調査協力者の声に耳を傾ける研究の深化であった。

博士論文では、そのことを踏まえ、日本語ボランティア教室や母語教室でスタッフとして活動している女性配偶者 4 名のライフストーリー（来日後から現在）を分析し、日本語学習支援の方向性について考察した。具体的には第 1 章では日本語ボランティアの役割の拡大と問題点について、第 2 章では社会教育、日本語教育分野、実践・調査報告を中心に概観し、先行研究に対する筆者の見解を述べた。第 3 章では調査協力者の学習を包括的に捉えるために援用したライフストーリー研究について紹介し、第 4 章では 4 人の調査協力者のライフストーリーを描いた。第 5 章では調査協力者たちのライフストーリーから得られた知見について述べ、第 6 章ではライフストーリー研究で得られた知見を基に支援の方向性を指摘した。そして「おわりに」の部分で、日本語を第二言語とする人びとに対する研究の留意点と今後の課題について言及した。

以下に得られた知見と成果を述べる。

一つには、調査協力者 4 名のライフストーリーから得た知見である。第一に調査協力者たち（以下、当事者たちとも表記）が成人女性として必要な日本語学習を望んでいることがあげられる。学習者というのは当事者たちの一面であって、参加コミュニティで成人女性として認めてもらいたいという気持ちが強く、日本語学習においても日本人女性のコミュニケーションの取り方、言い回しに強い関心を持っている。第二に調査協力者たちは、成人女性として多様なコミュニティに参加し、自己学習（マスメディア、母語、実践の場の利用）を進め、様々なスタイルの日本語（カジュアルな日本語、丁寧語、敬語）を意識し習得している。また、コミュニティに参加する中で視野を広げ、さらに教える側＝スタッフとして自分の「声」を伝えることで学習に発展や転機が見られた。第三に調査協力者たちは様々な経験や学習を通して実践的知識を蓄積して

いる。それは、日本で生きていくために必要な「生活知」、日常生活と日本語学習をつなげる「言語学習に関する知」、当事者である外国人参加者の気持ちを理解し、状況を判断することができる「共感」知、従来の教授方法などに関して、自分の経験とつなぎ合わせ「批判的に捉えることが可能な」知などである。また、調査協力者たちは、自らスタッフとして活動するときは、当事者の外国人に学習参加方法を自己決定させ、「理解する」、「納得する」ことを学習の始まりと考え、学習の場の雰囲気にも細やかな配慮をしている。第四に調査協力者たちが蓄積してきた知識には豊かな内実が保持されているが、日本語能力の不足や日本人ボランティアに対する遠慮から内容が伝わりにくいことが分かった。筆者は調査協力者たちが蓄積してきた知識は有用性が高いと考え、今後、日本で生きていくために日本語学習を行なってきた人びとのライフストーリーのコンテキスト解読の方法を深化させたい。

二つめは、日本語学習支援に対する2つの方向性を示した。第一は、学習者が培ってきた歴史（現在—未来＝将来ビジョン）を考慮した日本語学習支援の方向、第二は、外国人参加者が「学習者」であり、日本人ボランティアが「先生」という位置付けが変化するような日本語学習支援の方向である。次の5点があげられる。

- ① 学習者が母語を使用し声を伝えやすい環境を作る。
- ② 学習者が学習の主導権を取る。（自分には何ができて、何が不足していて、何が学びたいのか。）
- ③ 学習者が様々なコミュニティに参加し色々な人の声が聞ける機会を作る。
- ④ 学習者がコミュニティの中で、教える立場＝伝える立場になる機会を作る。
- ⑤ 外国人スタッフが学習できる機会を作る。

三つめは、先行研究批判と本論文の意義である。先行研究では外国人参加者と日本人ボランティアが「水平的な関係」を構築させるために、「共育」をキーワードにさまざまな教授法が志向されていた。（田中 1996、西口 1999、野元 2001、岡崎 2002 など。）しかし外国人参加者の学習プロセスが明らかにされないまま、「水平的な関係」を構築する際の基準が日本人ボランティア中心に進められるという矛盾した状況が起こっていた。本論文では4名という少数の事例ではあるが、当事者を調査対象にし、時間軸に沿って分析することで、日本語学習経験を明らかにするだけでなく、当事者たちが蓄積している実践的な知識についても提示することができた。そして「当事者が中心となる日本語学習支援」について方向性を提案できたことは、今後の日本語学習支援を考える上で重要な意義を果たしたと考える。

四つめは、今後の研究課題である。ライフストーリーを研究方法として援用することで多くの発見があり、関連諸分野の知見を研究に取り入れることができた。しかし他方では、新たな知見に対する自分なりの評価と認識が十分とは言いきれない面もあった。本論文の最後に述べた提案に関しての理論的裏付けや学問的問題提起に関して、今後の課題として以下の3つをあげたい。

第一に当事者が中心となるような学習コミュニティに関する研究を深めたい。当事者が自分の学習を計画し実行するためにはどのような環境が必要なのか。

今後、学習者オートノミーの視点（青木、2001:pp.189-196）と学習者が自己の学習を管理するためのツール（青木、尾崎、2004:p.129）について検討を重ね、研究を発展させたい。

第二にライフストーリーインタビューに関し、調査者が調査協力者に対して与える影響や調査協力者の声の拾い方について、方法的深化を図りたい。

第三に教室に参加できない人々、途中で辞めた人々の声にも耳を傾け、一人一人に合わせ、相手の変化に対応できるサポート体制について事例分析を重ねて実践的な研究方法を発展させたい。

# 学位論文審査の要旨

主査 教授 姉崎 洋一  
副査 教授 山岸 みどり  
副査 教授 木村 純  
副査 教授 青木 直子

(大阪大学大学院文学研究科)

## 学位論文題名

### 日本語を第二言語とする女性配偶者の 学習支援に関する研究

－ライフストーリーによる生と学びのとらえかえし－

本論文は、滞日外国人が急増した1990年代以降の日本社会において、外国人女性配偶者に焦点をあてて、その人々がどのように日本語に向き合い、能動的な学習者として、社会的位置づけを変容させていったかをライフストーリーの方法を用いて実証的に明らかにすることを課題としている。

外国人の日本語学習支援については、これまで、日本語構文、文法などの教授学的研究や、大学の留学生教育の日本語指導の蓄積などが先行してきたが、生活者としての外国人に対しては、方法論が未確立であった。近年日本語ボランティア教室などを通じて、日本語学習支援を行う実践が広がり、それを支える研究の発展が緊要とされてきたが、先行研究においては、①外国人参加者と日本人ボランティアとの関係性、外国人の日本語学習の生きたプロセスの解明が不十分であったり、②質問紙調査などによるマクロな量的分析では学習者の社会的文脈や学習プロセス理解が困難であったりした。③わずかに、批判発展させるべきものに、質的研究法を用いて調査協力者の生活世界に着目し、全人的な把握を試みるものがあった。しかし、エスノグラフィー的方法での現在分析や仮説の提示にとどまり歴史的な視点や実証が不十分であった。

本研究は、そのような限界を超えて、日本語を使って成人として自立した生活を営めるようになってきた外国人女性配偶者四名を調査協力者に措定し、ライフストーリーの方法を用いて長期間継続的な聴き取り（半構造化インタビュー

一) を重ね、調査協力者の個人の経験の関係性、物語の多声性、実践者としての意味づけを時間軸に沿って浮き彫りにして、その生の過程を微視的に明らかにしようとしたものである。従来外国人の日本語学習者にこのような方法を用いた研究は存在せず、本論文は研究の空白部分を埋める仮説の生成に関して貴重な実証成果を示した。同時に本論文は、能動的な成人生活者であり、日本語学習支援者(スタッフ)である彼女たちの役割と生のドラマに着目し、日本語学習支援は母語者が行うものとのドグマを打ち破り、日本語を学ぶ人達への新たな役割モデルを提供した。

本研究は、6章構成で、第1章では、修士論文を踏まえ、教師と学習者との上下関係のもとに知識の詰め込みと記憶中心の方法に終始している従来の日本語教育に対し、F国際交流センターにおける学びが連帯性、協同性、関係性の下に外国人参加者と日本人スタッフとの関係性の変容と外国人学習者の学びの新たな意味づけ、とくに、外国人学習者の学びと生活世界との闘争の過程解明が鍵であることを明確にした。第2章は日本語ボランティアの先行研究を整理し、本研究が従前の研究と異なり、外国人日本語学習者の自己統治力量拡大に向け外部世界と当事者の内面との葛藤のプロセスを微視的に明らかにすることを述べている。第3章は、日本語を第二言語とする外国人女性配偶者たちの多様な生の葛藤を描き出すための方法として、質的研究法=ライフストーリー研究を設定し、その具体的な調査手続きと研究上の仮説生成の可能性と限界を明らかにした。第4章は、日本語学習者と日本語学習支援者の両方の立場をもつ4人の調査協力者を、各人の物語の多声性と関係性に注目し調査協力者の生活場面の多様な接触の上に、異なる時点での数次の半構造化インタビュー、電話、メールなどを用い、その声を記録し再整理し、物語の構築を試みたものである。第5章は、四人のライフストーリーを分析的に整理し構造を明確にしようとするものである。方法論として、フェミニストペダゴジーの再吟味が試みられ、心理学モデルや構造主義モデルとの比較において E.Tisdell に代表されるポスト構造主義モデルの妥当性の可否を再吟味した。第6章は、本研究が明らかにし、課題として残したことを総括し、日本語教室改善の提案がされている。すなわち、第一に外国人学習者の Positionality (社会的位置づけ) や「学習者オートノミー」への着目の重要性、第二に、外国人学習者の第二言語表現に働く「見えない権力関係」の構造の解明、第三に、日本語教室に参加できない人々へのサポートの方策など、今後の理論的・実践的課題が明示されている。

本研究は、外国人学習者の教育実践構造理解の基底的要件、例えば、民族性、ジェンダー、母語での聴き取り研究などになお研鑽が求められるとはいえ、外国人女性配偶者の生の全体性と日本語学習との葛藤を明らかにするためのライフストーリーの方法を用いて日本語学習の質的改善を方向付ける先駆的な実証

研究として高く評価できる。

よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。